

アキシマクジラが 新種に認定されました

エスクリクティウス アキシマエンシス
学名：*Eschrichtius akishimaensis*

今から57年前、昭和36(1961)年8月20日に、多摩川河川敷でクジラの化石が発見されました。同様の種の化石が見つからないことから、新種のクジラとされ、アキシマクジラと命名されました。このクジラの化石の研究が進み、平成30年1月1日に学会誌に論文が掲載されました。コククジラ属の新種のクジラとして認められ、学名がつけました。

発表された記載論文

日本古生物学会誌「Paleontological Research」に、3人の研究者の連名で掲載されました。
・木村敏之さん(群馬県立自然史博物館幹学芸員)
・長谷川善和さん(群馬県立自然史博物館名誉館長)
・甲能直樹さん(国立科学博物館生命進化史研究グループ長)



木村敏之さん



長谷川善和さん



甲能直樹さん

◎論文タイトル

A new species of the genus *Eschrichtius* (Cetacea: Mysticeti) from the Early Pleistocene of Japan (日本の下部更新統より産出したコククジラ属の新種)

◎論文をご覧になるには

日本古生物学会ホームページに掲載している英文誌「Paleontological Research」のVol.22 No. 1 (平成30年1月1日発行)で、概要をご覧いただけます。また、論文全文は、市役所社会教育係で閲覧できます。なお、論文は、すべて英文です。

論文の概要

現在、コククジラ科のクジラは、1属1種のみが北太平洋に生息している。コククジラの化石記録は少なく、彼らの進化の道筋については不明な点が多い。

1961年、昭島市内の前期更新世(およそ177~195万年前)の地層から、クジラの化石が発見された。頭や下顎なども含めた、ほぼ全身の骨が発掘された。

この化石標本を、新種の「エスクリクティウス アキシマエンシス」として報告する。頭骨周辺の位置や形状の違いから、アキシマクジラは、現在生息しているコククジラとは異なる系統であるため、前期更新世では少なくともコククジラの2つの系統が生き残っていたことが分かった。不明な点が多かったコククジラの進化の道筋について、新たな情報が明らかとなった。

アキシマクジラは種の基準となり、今後、クジラ類の進化を研究するうえで重要な化石標本となる。



アキシマクジラのイメージ



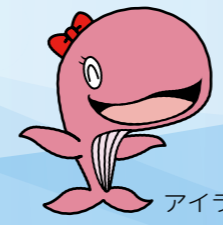
▼タウンホールのふた



▼昭島市民くじら祭



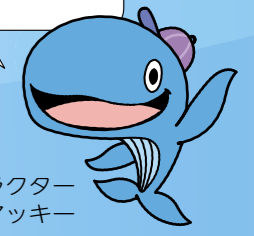
▼ポケットパークの壁画



アイラン

毎年8月に昭島市民くじら祭が開催されたり、市内のさまざまな場所にクジラのオブジェが設置されたりするなど、クジラは昭島市のシンボルになっているのよ！

2月15日に、市ホームページのアキシマクジラについての記事をリニューアルします。ぜひご覧ください！



昭島市公式キャラクター アッキー

アキシマクジラの発見・発掘

昭和36年8月20日に、多摩川河川敷を散策中の田島政人さん(元玉川小教諭/故人)と長男の芳夫さん(朝日町在住)により、八高線鉄橋の下流36mの地点で発見されました。

十数mに及ぶほぼ全骨格のクジラの化石が発見されたのは、当時、世界でも例がなく、全国的な大ニュースとなり世間をにぎわせました。



奇跡の連続

アキシマクジラが生きた時代、昭島はクジラが悠々と泳ぐ海の中でした。なんらかの理由で海岸近くの浅瀬で息絶えたクジラは、それから200万年もの長い眠りにつきました。



アキシマクジラが生きた時代の日本地図

その後、すぐに堆積物に埋まって破壊されなかったこと、その地層に大きな温度変化や圧力の影響がなかったこと、そして何より河原に化石の一部が露出したタイミングで発見されたこと。こうした奇跡の連続で、アキシマクジラは、私たちの前に現れたのです。もし数年発見が遅れていたら、川の浸食によって化石は失われていたことでしょう。

原寸大レプリカを制作中

平成32年3月に開設予定の(仮称)教育福祉総合センターのエントランスに、アキシマクジラの原寸大(約13.5m)のレプリカと、化石の一部を展示する予定です。



完成予想図